

おはるにまかねは
うきよへ、
病やまわせ
いとよ。そひいわのま
つらうら全は一文もまは



10

25

30

つまむら全は一文もあは
いとよ。そひてのま
えでたら、お歸つてから歸つ
るのあかといふが
どううす終ひます。
おじとしまやまきく
ねまのりんにがうちへ更
けりともす年月日月の
ぬまゆうす。出来じであ
ふかにあますりとも
来せと善びまづれまづ
多くうめせの方ぢやあ

弟也と筆がまちねまひ
手のうぢあませの方でやあ
あらうては因仕とくも
よひぐみうきよ、
僕二のちでたふいぢ
し病氣のきよどり。
元来宣筆をしむわすが
スコウドウシムの方、がりくの
もろきうちお。よいか共
あひとやめさせられけりが
うへとされぬがやめりだ
うひた辞職するみあ
うひよゆゆす。

ひもじに辭職する事あ
るまいと心に思ふ。

岸穂子は玄孫

たるあるうである。おまの

方で金のが少候了事

革がぬき、うござる

重ねぬれられても恵のん

二信をもとえふ。さて

あ。ちびつも一矢がんく

わいし肺病もまだはづ

あと何でよまと見えうけ

す。一矢でいわかば仕

利である。うへて今更、

す。一いぢでまかへるは
利ぢやう。うりてたゞ、
の行をあよとおはせば、
門に一任しと候ぬのこ
と國子がよみうらうと見えず。
僕は詳一いよ哉もから
ぬ。いつおきのよきがよ
う。筆をひまと報
ひす。實は我じでかく
きあゆ。實は我じでかく
あけようもあすまいとよ

ああめの秋りであつてが

あけようとありますまいとる

ので一らむおはまくに

しる。一立ちでわで延びる

ちまく。狂歌おひる

ま、うござ。どううじゆかの

つきや年々の事のちく

もとふくも報とち

つゝれ。たうさんむね

即ちい、ねじす。たし其

な院に拂きまくえう

くわくまくすむぢやめ

うくわく、たまえ

くらうすまむやま

えりんこ。夫のまへ

のやめじどう位で様で

もの金でさうもふ

くがえはあひに下

けじい、さざなわ。

お用よきゆ

ミナフ

重之物

丸陣舟

先達様

日本東京本御
千駄木町五十七
夏目金三

松

郵局印

清國南京三江
師範大學堂
管虎雄様
要士



35

30

25

20

15

10

5

